

北海道駒ヶ岳の火山活動解説資料（令和5年12月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

山頂火口原浅部の活動がやや活発化していますので、今後の火山活動の推移には注意が必要です。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図1-①～③、図2～4）

山頂に設置した監視カメラでは、昭和4年火口のごく弱い噴気を観測する日が時々ありました。ごく弱い噴気を観測する日数は、2021年秋以降増加する傾向が認められています。

各火口の噴気活動は引き続き低調な状態です。

・地震及び微動の発生状況（図1-④～⑥、図5～6）

7日に山頂火口原浅部（主に深さ1km付近）を震源とする振幅の小さな火山性地震が一時的に増加しました。山麓の観測点（西山麓）による7日の日回数は合計9回となり、そのうち7回が低周波地震でした。地震活動はその後も低周波地震を主として1日1回程度の頻度で続いており、12月の地震回数の合計は31回となりました。月回数が30回以上となったのは1990年4月の61回以来です。火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図7）

GNSS連続観測では、2022年頃から山頂火口原浅部の膨張を示すと考えられるわずかな変化が一部の基線で認められています。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所及び北海道のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』、『数値地図25000（行政界・海岸線）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和6年1月分）は令和6年2月8日に発表する予定です。

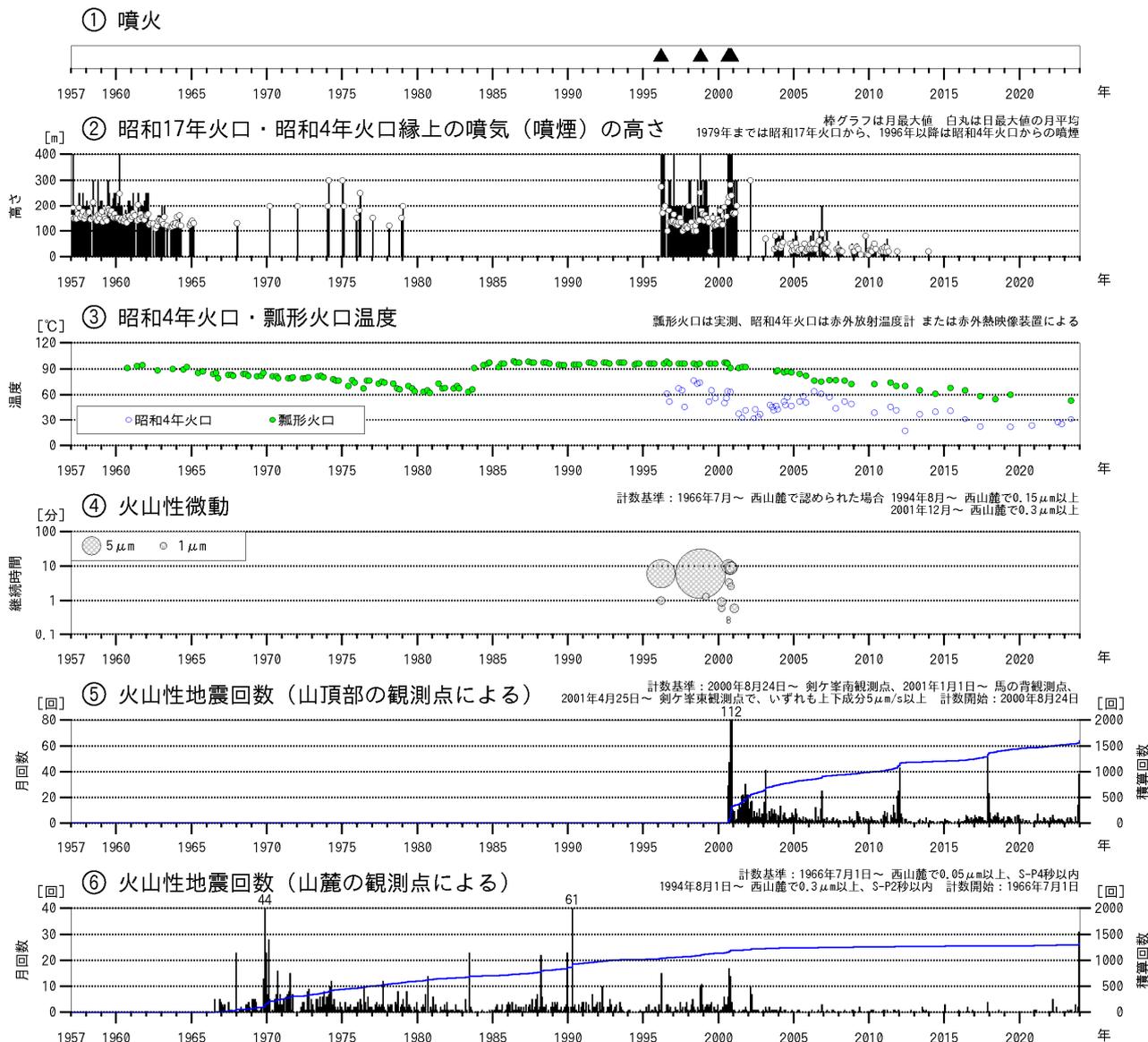


図1 北海道駒ヶ岳 火山活動経過図（1957年1月～2023年12月）

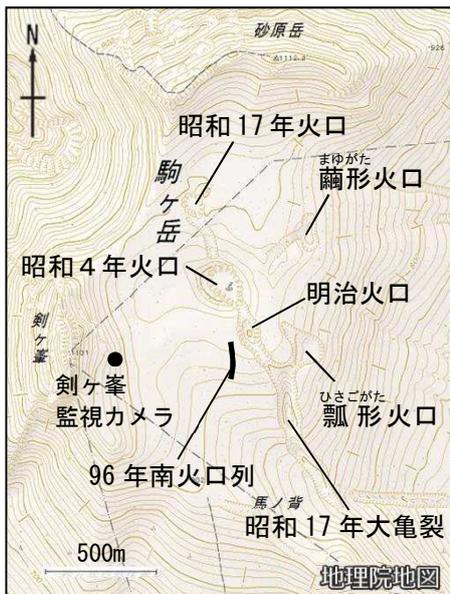


図2 北海道駒ヶ岳 周辺図



図3 北海道駒ヶ岳 西南西側から見た火口周辺の状況 (剣ヶ峰監視カメラによる)

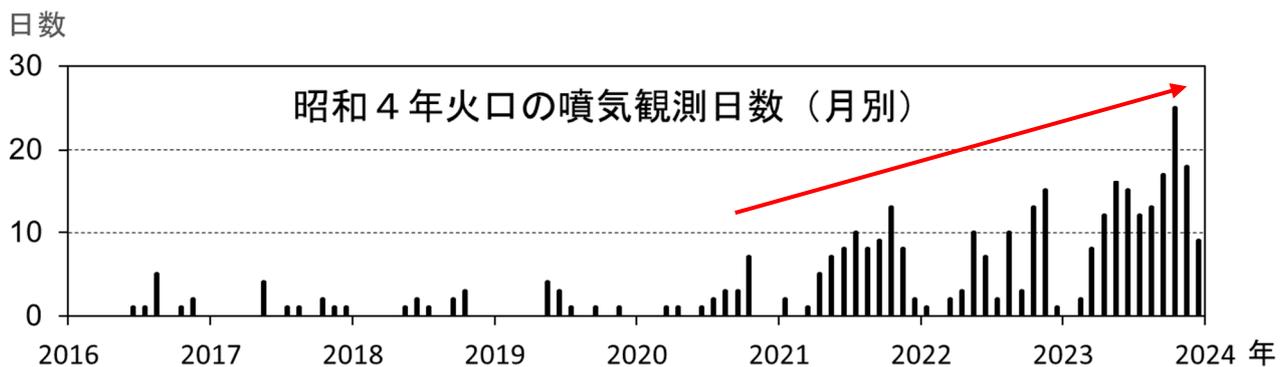


図4 北海道駒ヶ岳 昭和4年火口のごく弱い噴気を観測した日数 (2016年1月～2023年12月) 山頂部に設置した火口カメラ (剣ヶ峰監視カメラ) による

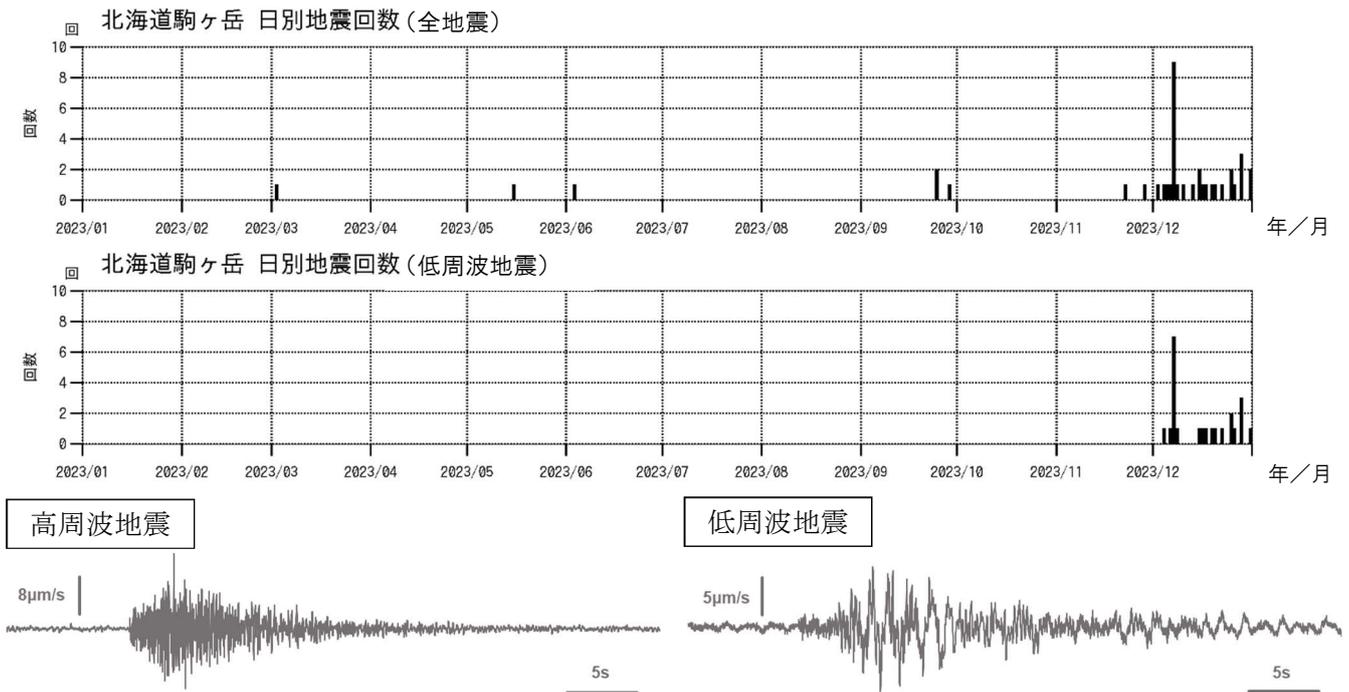


図5 北海道駒ヶ岳 日別地震回数（上段：全地震 下段：低周波地震 2023年1月～12月）及び火山性地震の波形例（左下：高周波地震 右下：低周波地震）

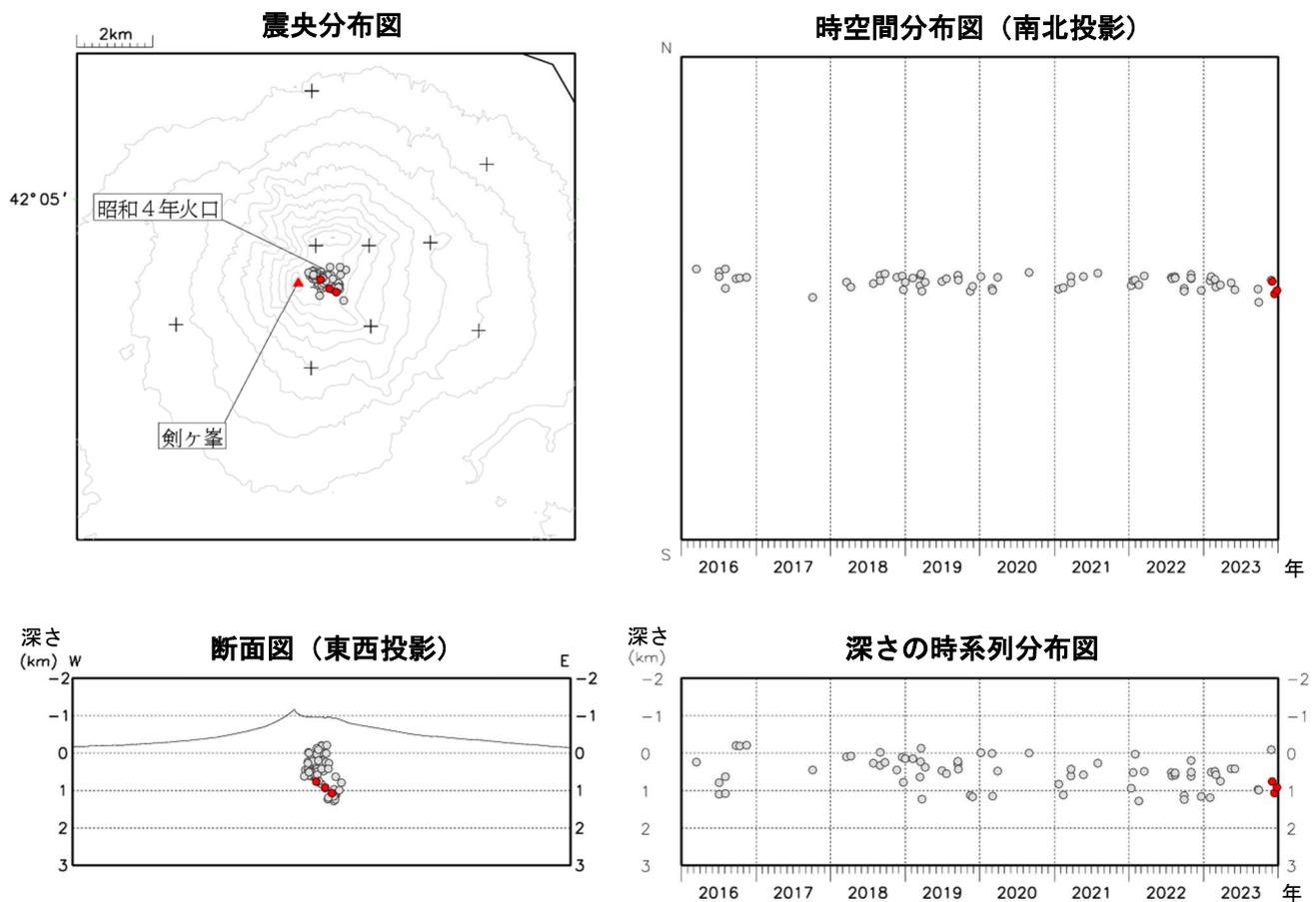


図6 北海道駒ヶ岳 火山性地震の震源分布（2016年1月～2023年12月）

●：2016年1月～2023年11月の震源 ●：2023年12月の震源 +：地震観測点

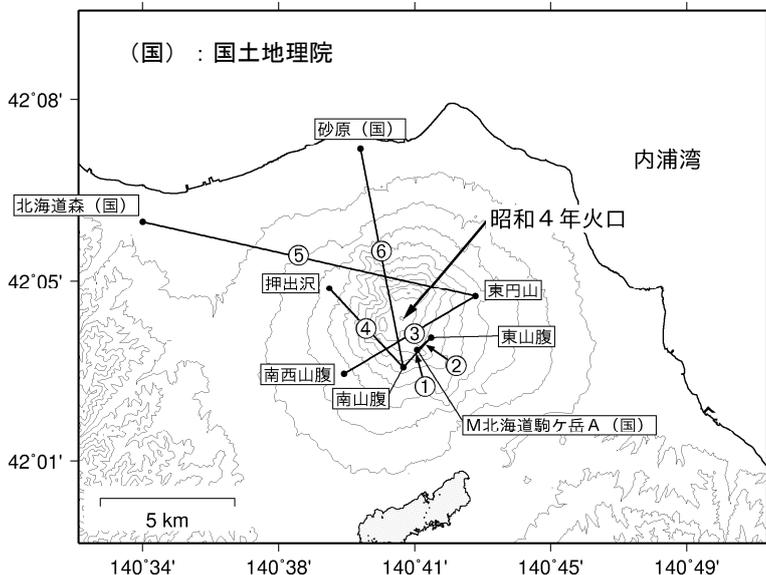
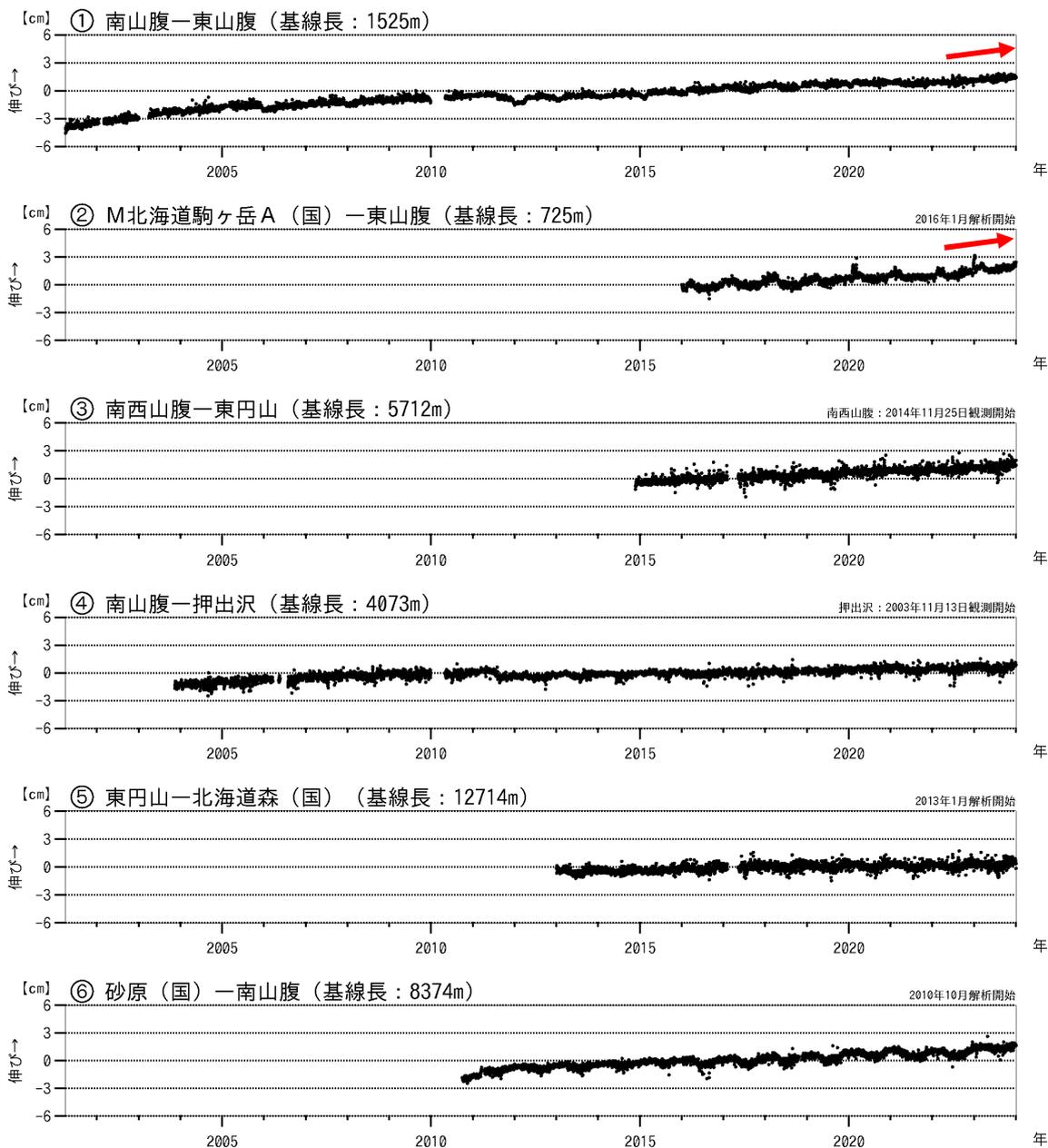


図7 北海道駒ヶ岳 GNSS連続観測による基線長変化(2001年4月～2023年12月)及び観測点配置図

グラフ①～⑥は観測点配置図の基線①～⑥に対応しています。
 グラフの空白部分は欠測を示します。

- ・2022年頃から山頂部の一部基線でわずかな伸長(赤矢印)が見られています

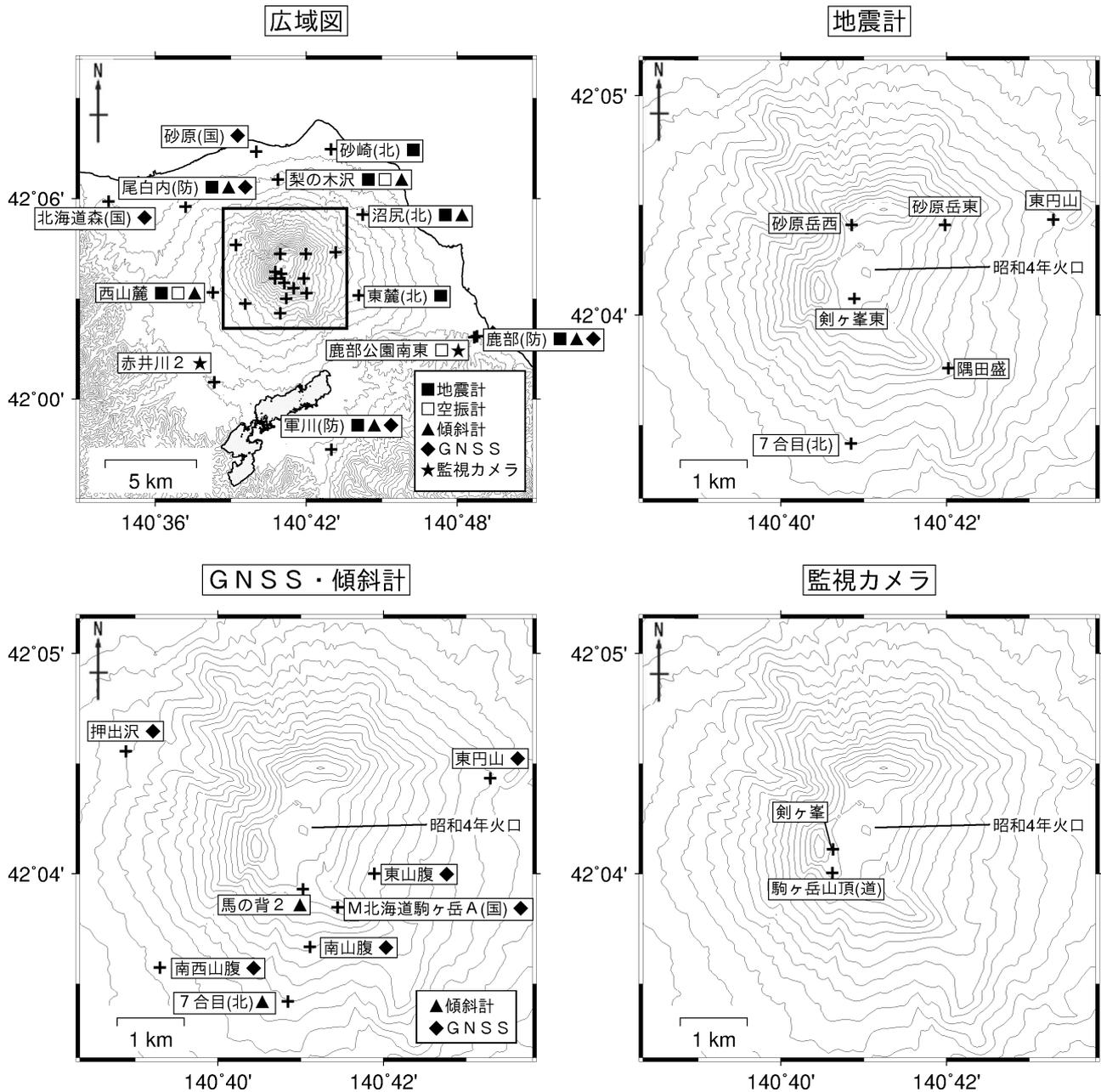


図8 北海道駒ヶ岳 観測点配置図

各機器の配置図は、広域図内の太枠線で囲まれた領域を拡大したものです。

+印は観測点の位置を示します。

気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。

- (国) : 国土地理院
- (北) : 北海道大学
- (防) : 国立研究開発法人防災科学技術研究所
- (道) : 北海道